「曖昧さへの態度」概念の臨床応用可能性(1)

—「曖昧さへの態度」尺度の因子構造の再検討—

○榎木宏之^{1,2}・甲田宗良¹・近藤 毅¹(非会員)

(¹琉球大学大学院 医学研究科 精神病態医学講座・²平和病院)

キーワード: 曖昧さへの態度, 因子分析, 臨床への応用

Clinical application of "attitudes towards ambiguity":

Re-examination of factor structure of Attitudes Towards Ambiguity Scale

○Hiroyuki ENOKI^{1,2}, Munenaga KODA¹ and Tsuyoshi KONDO^{1,*}

(¹Graduate School of Medicine, University of Ryukyus, ²Heiwa Hospital)

Key Words: attitudes towards ambiguity, factor analysis, clinical application

目 的

われわれの日常生活は状況によって柔軟に対応が求められる曖昧なものである。曖昧さへの態度は、曖昧な刺激の処理において生じる、認知的、情緒的反応パターンとみることができ、パターンの違いは、態度による個人差があることが指摘されている。曖昧さに対して適切な処理ができないことは、精神疾患と関連していることが言われているが、態度の側面からはまだ十分に明らかにされていない。

精神疾患を有する成人の臨床群の曖昧さに対する態度の特徴を明確するために応用するためには、比較対照群としての健常者の曖昧さに対する態度の構造を明確する必要がある。従来の曖昧さへの態度研究では、対象が主に学生であり、青年期以外の対象については十分に検討されていない。そこで、本研究では年齢層を青年期からさらに高齢者まで対象を広げて、曖昧さへの態度の因子構造を再検討することを目的とする。

方 法

対象者 一般成人に質問紙調査を実施し、1003名を対象とした(男性501名,女性503名;年齢[歳] $M=33.84$, $SD=12.59$, $range=18-78$)。

実施方法 関東, 中国, 四国, 九州, 沖縄地区の5地域の在住者を対象とし、縁故法による質問紙調査を行った。実施に際しては、調査の目的を書面に説明し、回答は任意とした。記入する個人の属性として、年齢・性別・現在の就業状況の3点について回答を求めた。実施期間は、2013年11月1日～同年12月末日である。回収した1298名の質問票から欠損値のあるサンプルを除外して、欠損値のないサンプルのみを対象とした。

測定内容 対象者へ「曖昧さへの態度尺度」(Attitudes towards Ambiguity Scale: ATAS; 西村, 2007)を含む質問票を配布し、回答を求めた。ATASは、全26項目で構成され1項目を6件法で評価し、「曖昧さの享受」「曖昧さへの不安」「曖昧さの受容」「曖昧さの統制」「曖昧さの排除」の5因子で構成される多次元尺度である。

分析方法 1)幅広い年齢層を対象とする曖昧さへの態度の因子構造を再検討するためATASの因子分析を行った。2)因子分析後の因子のdemographicな側面からの特徴を明らかにするため、ATASの特徴抽出されたATAS各因子と年齢の相関分析と、男女2群間と各因子のt検定を行った。

倫理的配慮 本調査研究は、琉球大学疫学研究倫理審査委員会の承認を得ている(承認番号175)。対象者の調査への協力は自発的なものとし、調査によって利害関係が生じないことや、個人情報には守られることを、対象者へ書面を通して説明した。

結 果

ATAS 全26項目の質問項目について因子分析を行った。因子の抽出には、重み付けのない最小二乗法を用い、プロマックス回転を行った。スクリープロットを作成したところ、4因子構造であることが示唆され、4因子を抽出した。因子負荷量が.39以上の25項目に対して、再度因子数を4因子に指定して因子分析を行った結果、全25項目の因子負荷量が.39以上であり、最終的に因子は4因子で構成されることを確定した。第1因子は「enjoyment」(12項目, $\alpha=.836$)、第2因子は「anxiety」(6項目, $\alpha=.749$)、第3因子は「exclusion」(4項目, $\alpha=.756$)、第4因子は「acceptance」(3項目, $\alpha=.665$)と命名した。次に、各因子の信頼性を検討するためcronbachの α 係数を算出した結果、enjoyment ($\alpha=.836$)、anxiety ($\alpha=.749$)、exclusion($\alpha=.756$)、acceptance ($\alpha=.665$)という結果を得た。因子間相関では、acceptanceとexclusionの間に有意な負の相関($r=-.190$, $p<.0001$)が認められた。

得られた4因子と年齢との相関分析の結果、4因子の中でanxietyとの間でのみ有意な相関($r=-.257$, $p<.0001$)が認められた。男女間で各因子に対して対応のないt検定を行った結果、anxietyにおいてのみ女性が有意に高い結果が認められた[$t(1001)=6.64$, $p<.0001$]。

考 察

今回の因子分析の結果から、曖昧さへの態度は4因子の因子構造で構成されることが示唆された。先行研究(西村, 2007)の5因子と異なる結果が導き出され、「曖昧さの統制」因子は、他の因子に吸収され、中立的な特徴を内包している可能性が伺える。また、本研究では対象を大学生だけではなく、社会人や高齢者も対象に含まれていることも今回の結果に影響している可能性が考えられる。また、高齢になるほど曖昧さに対する不安が軽減すること、女性の方が曖昧さに対して不安になる傾向があることなどが示唆された。

今後、本研究と同様に幅広い年齢層が対象となる臨床群の曖昧さの特徴と精神病理の関連を検討する上で、今回抽出された因子構造を用いてゆくことは意義があると考えられる。

引用文献

西村 佐彩子(2007). 曖昧さへの態度の多次元構造の検討 - 曖昧性耐性ととの比較を通して パーソナリティ研究, 15, 183-194.